

# 自由南アフリカの声

## Voice of Free South Africa

2018年9月

No. 72

～ 1冊の本が人生を変える～

発行 / アジア・アフリカと共に歩む会

Together with Africa and Asia Association (TAAA)



## 2018年9月の報告

- 2月～9月 南アにて図書・学校菜園・サッカー・IT支援活動など。図書研修会、有機農業研修会、農業塾。国内にて、英語の本などを収集、分類・再梱包作業
- 3月 南アにて有機農業トレーニングコース開催
- 3月 南アにてブックレビューコンテスト開催
- 6月 TAAA 代表ほか、南アを訪問
- 7月 TAAA 活動報告会
- 9月 東京農大派遣学生の受け入れ

目次	• 現地プロジェクト訪問報告（大友深雪）	2
	• 農業・図書・算数セット・サッカーを通して（平林薫）	6
	• 8月19日の作業～小さな手から～（西村裕子）	9
	• 2017年度決算報告書	10
	• 活動日誌	11
	• 寄付金や本などを下さった方々	12



農業塾図書室で飛び出す絵本を楽しむムタルメ小の生徒たち

Respect の交叉に Ubuntu の息づかいをかみしめた2018年の旅

# 現地プロジェクト訪問報告

2018年6月（17日～25日）

大友 深雪

今年の久我さんと大友での現地プロジェクト訪問は、JICA 草の根技術支援事業「有機農業塾を拠点とした農村作り」の最終年度視察に重点を置いたものでしたが、学校図書プロジェクトの状況確認なども行ってきましたので、私はその部分の報告と全般的感想のようなものを綴らせていただきます。

## ○TAAA からの本の配布が引き出す ELITS の動き

昨年設置され、2人の司書担当教員に出迎えられた Fundeduze Primary コンテナ図書室は中も美しく、使いやすく整備され、州教育省図書部門 (ELITS) から配布された本も相当数入っていました。訪問時にはコンテナの左右の角2箇所に設けられた椅子と机にそれぞれ生徒が3人ずつ座って、ブックレビューを作成しているところでした。ELITS 配布図書が充実しているように思えたので、確認してみると、地域の学校の図書担当教員が集まって選書したものが配られているという、うれしい話が聞けました。図書室・書棚・生徒の図書活動そしてそこそこの蔵書という基盤が整えば、それが呼び水となって州教育省の本来の仕事（本の配布の部分だけですが）も進むのだということ、そして対象地域の学校への TAAA からの配布が不要になる日が近いことを実感しました。今後 TAAA からの本の配布は、農業塾



筆者（手前）と久我祐子（右）

のリソースセンターや、いままで対象としていなかった近隣地域の図書室のない学校を中心に考えて行くことになりそうです。今回の訪問では、今後そのような対象になりそうな小学校を訪問しました。そこでは、校長の熱意で各クラスにコーナー・ライブラリーなるものが設置されていたものの、中身は古い、あるいは余った教科書類だったので、この学校にもELITSの本が届くように、誘い水になる日本からの本をモンドリさんが数冊ずつでも各クラスのコーナー・ライブラリーに届けることもありではないかなと思いました。

## ○図書プロジェクト現地チーフ・スタッフのモンドリ・チリザさんの活躍



4年前はルテウーリ高校の図書委員会活動を引っ張っていた3年生、2015年からは TAAA 図書プロジェクト現地スタッフの一人、今年度は唯一の図書館プロジェクトチーフとして大活躍のモンドリ・チリザさんが、地道な活動を続けていることが確認できました。具体的には、継続支援の必要な10校で読み書き強化プログラムとしての図書室・図書委員会指導、日本から送付している算数セットを使った小学校低学年対象のバイリンガル算数授業、昨年度のパソコン指導対象校の月例モニタリング、新規の一小学校高学年への IT 基礎授業、日本から送付の本の配布、教育省の地域学区事務所へ委譲した移動図書館車固定版の最終整備受け渡し作業・その後のモニタリング、農業塾リソースセンターの応援などを一手に担い、22歳とは思えぬ配慮と沈着冷静さでてきぱきと仕事をこなす誠実な働き方に感動を覚えました。



彼に対する信頼は、平林さんからのものもとより、各学校の教職員・生徒双方からのものも、相当厚いと実感しました。そんな彼が、「今抱える一番の問題は何か」という私たちの問いに、「図書司書の先生の何人かが、図書室を訪れる生徒、そして図書委員会メンバーに対しても、信頼が薄く、子ども達に図書室（中にある本やコンピューター）利用を任せてくれないことです」と打ち明けてくれたのです。彼の場合、高校の図書委員会委員時代には図書室の鍵も託されていたし、図書室をかなり自由に最大限利用できて成長できた今の自分があるので、生徒たちをもっと信じて自由に活動させてもらえるよう、特に図書司書の先生方と話し合いを続けていきたいと前向きに語ってくれました。

課題とされながらまだ取り組めていないものとして、「菜園委員会生徒にパソコン操作を指導し、菜園活動の帳簿や記録を作成できるようにする」というものがあることを確認し、これまで広域で大がかりにやってきたブック・レビュー朗読披露のイベントは、歩いて行き来できる範囲の数校単位でお金もかけないで、

気楽にちよくちよく実施してはどうか、またそんな単位で、ブックボックスの交換や図書司書間・図書委員会間の交流も企画できると良いのではということ提言してきました。



## ○アパートヘイトで寸断された農業を「生きなおしている」人たち

MOATS（農業塾）のトレーニングコースの卒業生や先行プロジェクトのモニタリング先で個人であるいはコミュニティで有機農業を続けている方たち、MOATSで育てた有機苗の買い手としてファシリテーターの一人であるナチさんがリクルートした家族やグループなどを訪問する機会に恵まれました。画才があれば、思わず肖像画を描きたくなるような魅力を放っている人たちでしたが、ここでは印象に残った4人を紹介してみます。

JICA 先々行事業の対象コミュニティ菜園グループのメンバーで、一時中断していたものの、自分たちが死ぬ前に若ものたちに自分たちの農法を伝えておきたいという思いで、菜園活動を再開させていた老齢の男女に会うことができました。農業省からもらっていた種が、届くのが遅いし、キャベツがうまく育たなかったので、Coastal Farmers から買うようになったとのことでした。私たちの訪問時には、MOATS に注文してあったほうれん草とピーマンの苗計

3箱をうけとり、若い男性3人に苗を運ばせ、牛糞を取りに行かせ、畝を作らせながら、MOATS のものは良質なので、採種するつもりだと言っていました。若者達は失業したから親・祖父母の世代の畑に戻ってきたのかもしれませんが、先々行プロジェクト以来つけているという帳簿・記録も、この若者達に引き継がれて行き、自給用に販売用も若干加えながら生産を持続させていけることを期待したいと思いました。

思うところあって学校勤務から早期退職したという小学校の元校長は、MOATS の出張（オンサイト）トレーニングで有機農法を学んだ仲間といっしょに地域のシングルマザーを集め、計7人で、自宅の農地でのグループ菜園（エソム＝サズルー語で grace の意味）を始めていました。収穫を自家消費用としてグループ内で分けても販売用が残るだけの規模になっており、課題としては冬期の水確保があるが、鶏糞確保のためにも養鶏を学びたいと張り

切っていました。彼女らに賑やかに歓迎され、振る舞われたキュウリ・ブロッコリー・ほうれん草で青みがつけられたヨーグルトバナナジュースの美味しい味は忘れられず、日本に帰って再現して広めています。

子どもの学校で保護者として、MOATS を紹介されたという29歳、9人家族のお母さんは、若い頃から農業が好きで豆やトウモロコシは栽培していたそうです。川から水を家の畑まで持ってあがってくるのが大変だが、今は有機農法を楽しんでおり、トマトは採種を予定しているが、他の野菜の種は、乗り合いタクシーで、スーパーまで買いに行っていて、いずれは地元の10人ぐらいには売れるようになりたいと話してくれました。また有機農法が土壌にも良いということを知ってから、化学肥料栽培と有機栽培の両方をやっている隣人に、有機だけにす





るように説得しているとのことでした。動物よけの垣根ができていたので、誰が作ったか聞くと、「私よ。垣根は自分で作るものよ」と頼もしい限りでした。

最後に、MOATSの卒業生でダーバンの学校に通いながら、普段はお母さんに任せ、休みの時だけ畑をやっているという28歳の女性を紹介します。訪問時には丁度お母さんと二人でお母さん自作の織機の前に座って、注文を受けたマット（ゴザ）の製作中でした。私たちの訪問に、その手を止めてやや重たそうな腰を上げ、家の前に広がる彼女の畑を案内してくれました。急坂を30分ぐらい下ったところに竹やゴザの材料になる葦のようなものも繁茂する川がありそこから水を汲んで来ているということでした。お父さんに手伝ってもらって作ったという動物よけの竹を支柱に枯れ木で編まれたフェンスに囲まれた8畝ぐらいの畑には、ほうれん草、にんじん、タマネギ、キャベツの他に唐辛子とレモンの木が植わっていました。3色のビニールが風に舞って魅惑的な雰囲気を出していた彼女お手製の案山子に注目した直後、畑を荒らしかねない山羊の小屋を畑上方に隣接させて、その底部から山羊の糞が自動的に彼女の畑のあぜ道に落ちるよう傾斜を付けたしかけには、思わず感嘆の声を上げてしまいました。さらに私たちをうならせたのは、お母さんと兄弟と同居し、2人の子持ちのシングルマザーであるやや無愛想な彼女が、なんと、ダーバンでの経営・財政学の勉強がおわったら、地元で有機農業ビジネスをやるつもりだと言ってにっこり笑ったときでした。これから18ヶ月の実習があり、学校を終了したらいずれ右側の空き地にも畑を広げたいと語ってくれま

した。

再びお母さんとのゴザ編みに戻った彼女に別れを告げてしばらく下ると、日用雑貨と日持ちする若干の食糧を揃えている小さなお店を見つけました。そこを一人でやっているらしい若い女性に野菜の品揃えを確認したところ、持ちの良いジャガイモやタマネギ以外は、腐らせてしまったことがあるので置いていないと言われました。将来この店と彼女がタイアップして、新鮮野菜は彼女の家の畑で直売する仕組みをつくれないうるか勝手に夢を膨らませてしまいました。



## ○心が痛む「教育における competition」、「畑の GM seeds」、「都市部の gentrification」

南ア学校文化におけるコンテスト主義は、賞品が目当てということがあっても、ずっと気になっていました。1990年代初期の初めての南ア訪問時に招待された感動的な合唱祭でも順位を競っていましたが、各合唱自体がすばらしかっただけに、順位付け儀式を見ていて興ざめたことを今でも覚えています。今回環境省の若い女性役人が、「タダでもらえることを期待する依存体質から脱出させたい」と発言したのでどんなアイデアが出てくるのかと期待して聞いていたら、「もらえる資格をめぐる張り合わせよう」という趣旨だったので。南アに限らず、競争でしか引き出せない「やる気」とは何だろうと、今でも問い続けています。

日本でも「主要農作物種子法」廃止が問題になっていたこともあって、滞在期間中とても気になったもう一つのこと、種が良くなって育ちが悪い、採種ができないという苦情と“fake seeds”でないものを手に入れられるような情報提供が大切だという MOATS のファシリテーターの言葉でした。地域の農民によって伝統的に行われて来た採種・保存・交換（公的種子制度）という財産を多国籍企

業が独占し、農民は毎回企業から種子を買わされる新体制がすでに世界を席巻しています。日本でも他人事ではないこの事態に、水同様、本来共有財産である種子を企業に独占させない運動を考えなくてはならないことをあらためて痛感しています。





最終日、南ア大使館と JICA に立ち寄るために、ワールドカップ開催にあわせてフランス資本が入って建設されたというプレトリア・ジョハネス間の高速鉄道に乗って、20年前には考えられない快適・利便を味わいつつも、ホームで飴をなめようとしたら、ホーム毎に立つガードマンに飲食禁止だと注意され、反アパルトヘイト運動に関わり始めたころ、「ゴミのないきれいな町には民主主義はない」という趣旨のことを明治学院大の勝俣誠さんがおっしゃっていたことを思い出さずにはられませんでした。日本で

も2020年の東京オリンピックに向けて競争主義と都市再開発そして治安維持対策が加熱してとどまるところを知らないことに憤りを覚えています。今回の南ア訪問を経て、勝者の栄光を讃えるためあるいは富者の利便性を高めるために、旧居住者を追い出して最新の施設を作ってセキュリティーを強化する「近代化」は、「敗者・貧者・弱者・不浄の排除」を前提とする以上、民主主義に反する以前に、民衆の生存権を脅かす由々しきものであるという認識を強くしました。

## ○今訪問で実感できた2018年の ubuntu

図書プロジェクトの現地スタッフのモンドリ・チリザさん(写真:右)は、「図書活動命」の22歳ですが、近所の学校の生徒達にサッカー遊びを呼びかけ、友達が友達を誘い、とうとうチームを編成できるまでの人数があつまって、始めてから1年でサッカークラブの「オーナー兼監督」にもなっていました。滞在中の土曜日の午後、他の地元チームとの試合を見に来て欲しいと言われ、開始直前に観客の私たちも散らかっていたガラスビンの破片やゴミの片付けを手伝ったコミュニティサッカーフィールドでしたが、ほぼ全員が裸足で活躍する素敵なプレイと引き分け試合を楽しませてもらいました。試合中・試合後のモンドリ監督とクラブメンバーの小中学生たちのやりとりを見聞きし、子ども達がモンドリさんをととても尊敬している様子に注目した久我さんが「子ども達はあなたのことを尊敬してますね」と声をかけると、モンドリさんは「はい、そうです。私も彼らを尊敬していますから」と即答。担当の図書プロジェクトでは、図書司書の先生方の生徒に対する信頼が十分でないことが一番の問題だという彼の訴えに通ずるもので、これは日本へ持ち帰るべき最大のおみやげだと思いました。

失業率の高い南アで、この地域の若者達が有機農法を学び(アパルトヘイトで破壊される前の伝統農法を取り戻し)地産地消で月に200ランド(=日本の生活費感覚で2万円相当)家計費を節約できることを追求できるのも、一人当たり資産400万円以下、年収30万円以下で南ア市民権・IDを持つ60歳以上に支給される高齢者手当(「アパルトヘイト下から始まっていた非拠出型年金」との説明もある)と呼ばれる祖父・父母の「収入」を当てにできるからかも知れないということに気づきました。富裕白人社会からの税金で財源が賄われ、南アの2重構造を正当化しかねない制度ではありますが、日本においても広がる一方の経済格差に対して、富の再配分法、ベシクインカム制度などを検討する上で、貴重なヒント・事例を提供されていることにあらためて思いが至りました。

多国籍企業の支配に抗して人間らしさを取り戻すためにと友人から指南されて今年に入って Linux ubuntu コンピューターを使い始めていたこともあり、南ア



の ubuntu (ズール語で他者との共感、思いやりの意)を再確認したいと思っていました。1980年代に南アと出会った私にとっての ubuntu は “Every child is my child.” という反アパルトヘイト運動のなかの1スローガンでした。2018年の旅で私が実感した ubuntu は、“Respect is for Each Other.” といえるモンドリさんの実践でした。お互いに気分のよいまともな人間関係を構築するために、経済格差を土台にした様々な格差による分断、上意下達、同調圧力、忖度などをどう克服していくかが、日本の私たちの課題であることを認識する旅でもありました。



本の整理をする生徒たち



# 農業・図書・算数セット・サッカーを通して

平林 薫 (TAAA 南ア事務所代表)

## ■ JICA 有機農業事業

JICA 草の根技術協力事業“有機農業塾を拠点とした農村作り”のプロジェクトは、2016年7月の開始から2年が過ぎ、残すところ約半年となった。農業塾は現地では MOATS と呼ばれ (Mthwalume Organic Agricultural Training School の頭文字)、図書室・リソースセンターも含めて地域住民や生徒に利用されている。これまで農業塾内でのトレーニングコースで77名、山間部の学校を拠点とした出張トレーニングコースで35名の計112名が卒業となった。主に若者を対象としていることから、トレーニング修了後にカレッジに進んだり、仕事に就いたりして畑作りから離れてしまった卒業生もいるが、多くはそれぞれの生活環境に合わせた活動を行っている。彼らこそが地域の将来を担う若者たちであり、トレーニングコースで学んだ有機農業の知識と技術は必ず何らかの形で役立つ時が来るのではないかと考える。農業塾のプレートに刻まれた“Organic Farming, Our tradition, our future (有機農業、私たちの伝統、私たちの未来)”の通り、伝統を守りながら、地域の新しい農業を切り開いて行って欲しい。

上記の山間部での出張トレーニングコースは、2月27日から3月28日までトフェット地域のシボングジェケ高と、少し手前(ココロ寄り)のソスクワナ小を会場として同時に開催し、それぞれスタッフのボングムーサとシャリが指導に当たった。その後リクエストが入ったため、5月2日から31日まで再度ソスクワナ小で開催した。シボングジェケ高は空いている教室がないことから、大きな木の下で青空教室となった。トレーニングコースでは有機農業の基礎的知識と技術実地指導の他、ボングムーサのお父さんによる地域の伝統作物や文化・生活習慣などの授業、州環境省ザマ氏による環境保全についての講義や将来の進路へのアドバイス、スタッフのムコリシによる基礎的IT指導、リチャード・ハイグ氏のエナレニ農場での研修なども行っている。ハイグ氏は私自身や指導員にとって師であり、ハイグ氏から指導を受けた人たちは、彼の農業への情熱と魅力的な人柄に大きな影響を受ける。それほど大きくはない農場の中で、ありとあらゆる有機農業活動をしている姿に触れ、参加者は“私にも何か一つはできるかもしれない”という気持ちにさせられるのだ。先行事業の学校菜園活動で小学生の時にエナレニ農場研修会に参加した生徒は、当時の強烈な印象が忘れられないようで、現在高校生になって“将来、有機農業に従事したい”と話す。

トレーニング基礎コースの修了者を対象に、上級コース



として養鶏研修も開催した。会報71号で紹介した農業塾の鶏(クーック)はすっかり大きくなり、敷地内畑の種をほじくったり、苗を食べたりすることから、鶏舎と果樹園にかけてフェンスを張って行動を少し制限することにした。卵を産み始めたところで、そろそろ孵化が見られるのではないかと楽しみだ。有機卵の味の良さ(濃さ)に驚いた。今後上級コースとして、食品加工(瓶詰め・食品乾燥)や栄養価を逃さない調理方法の研修会も予定している。そして畑作りを継続して行う上で最も大切な採種と種の保存に関しても、簡潔なマニュアルを作成し、研修会時に指導を行う。

シボングジェケ高でのトレーニングコースの参加者は主に同校の卒業生で、コース修了後に早速グループを結成して畑作りを開始し、すでに協同組合登録申請も済ませた。スムーズに活動を進めることができた要因の一つは、彼らが高校時代に先行プロジェクトで菜園活動に携わっていたことであろう。学校内および家庭菜園での経験を持った上でトレーニングコースを受講し、知識と技術を深めたことが彼らの自信につながったのだ。また、スタッフのボングムーサの熱心な指導や、州環境省ザマ氏のあらゆる情報提供やサポートも大きな力になったことと思う。この地域には土壌の良い広い土地があり、灌漑用水としての年中枯れない川も近いという恵まれた環境の下で、畑作りへの情熱を持った若者たちが就農を目指して一歩踏み出した。

ちょうど卒業生たちが独り立ちに向けて頑張っていた5月中旬、シボングジェケ高で菜園プロジェクトの担当教師として活発に取り組んでくれたコザ先生が糖尿病の悪化で急逝された。彼女は家が遠いので月~金曜日は学校近くのコテージに他の先生方と宿泊しており、当日の朝も普通どおり支度をして出勤するところだったという。コザ先生は



菜園活動と図書活動も担当していただき、彼女の生徒への愛情と誠実な仕事ぶりにより、両方の活動が校内にしっかりと定着できたことを心から感謝し、ご冥福を祈っている。

山間部の対象校シャバ小学校の元校長であるムキゼ先生は地元の出身で、校長の時から学校の生徒のみならず、地域の人たちのことを常に思いやっていた。まだ定年には満たないのにどうして退職したのかと思っていたら、何と地域の女性たちと有機菜園作りを始めていた。ムキゼ先生はソスクワナ小でのトレーニングコースにも参加して有機農業の知識と技術を深め、その後、農業塾から苗を購入して畑作りを拡大している。有給で畑仕事をするメンバー、少しお手伝いをして収穫物をもらうメンバー、遠くまで行かずに新鮮な野菜が購入できるようになった近隣の住民と、地域の人たちに大変良い効果を与えている。

今期、ココロ地域農業塾卒業生への活動モニタリングとしてアンケート調査を行った。ココロ地域卒業生77名中、53名から回答。残り24名中、1名（ンコシナチ）は指導員となり、女性1名は亡くなった。学校に通っている2名は提出がなかったが、休みには家族と畑仕事をしている。20名は仕事で町に出るなど畑作りから離れている。現時点で継続できていない卒業生にはそれぞれ理由があるが、全く初めて有機農業を学んだ若い女性で、近くに一緒に活動を行える人がいない場合、一人で続けていく自信や経験が不足していたと考えられる。卒業生がより有機農業の知識や技術を深めるための情報入手や経験交流の場として、また、実地トレーニングや苗の入手にも農業塾を有効に活用してもらえそうなシステム作りと情報発信を強化して行きたい。

6月の久我さん、大友さんの視察訪問時に卒業生の菜園活動モニタリングを行った。第2回コース卒業生のジロコトさんは現在ダーバンで財政経営学を勉強中だが、家族のサポートもあって家庭菜園を継続して行っている。また、葦（アシ）を使った伝統的なマット作りをお母さんから学んでいる。将来、地域内で有機農業をビジネスにしたいと話している。

小規模農業がほとんど行われていない地域では、先例から学ぶことができない。就農を目指して頑張っている第3コースの卒業生には、有機農業の中で様々なことにチャレンジしてもらい、この地域においてベストの方法を探ってもらいたいと思う。その次の世代の人たちが学べるような実例があれば、違う地域で同じ方法を用いることもできるし、同じ地域内では差別化を図った取り組みを考える若者も出てくると思う。シャボンガ・チリザさんは家の畑での収穫を近隣の住民に販売して夏期には月平均3000ランド（3万円弱）の収入を得ている。スーパーに卸す際、農業塾のピックアップトラックをR70で利用するなどの試みも行っている。南アは車社会だが、遠隔地域の人たちの車



所有率はまだ低く、公共交通システムの整備も不十分であるため、事業終了後の移動及び輸送手段の計画が必要である。そのようなことを考えると、収穫物の販売は徒歩圏内の近隣住民に対して行うことが最も効率的と言える。

南アでは物価がどんどん上昇しており、例え販売しなくても、収穫物を家庭で利用することは現金の節約になる。やはり、安全で栄養価の高い収穫物をまず家庭内で利用することが有機畑作りの一番の目的と言えるだろう。農業塾卒業生には、有機作物生産、収穫物の販売を通して、地域の人たちへの“有機作物の栄養価の高さと安全性、美味しさ”を伝える役割を果たしてもらいたいと思っている。

前述のチリザさんの家の畑は敷地の広さに限界があり、灌漑用水が入手しづらい山の上に位置していることもあり、適切な活動場所を探していた。また、スタッフのンコシナチも農業塾育苗所の苗の営業活動をしていたところ、この地域のランドマークでもあるムシカジ山のふもとのグループと出合った。ムシカジグループは、ウグ郡での最初のJICA 学校菜園事業（2010～12年）の地域住民プログラムにヒバディーン/ムタルメ地域グループとして参加した。当時、化学肥料を使った畑作りをしばらく続けた後、高価な物品が購入できなくなり活動が滞っていたところで、有機農法を取り入れたことで“もともと行っていた農業”に戻り、安全で質の高い作物を生産することができるようになった。事業終了後は連絡を取り合う機会がなかったが、今回、農業塾卒業生の活動を通して再会できたのはとてもうれしかった。当時のメンバーは何人かが離れていたが、若い男性メンバー数名が参加して再出発をしたところで、とてもタイミングがよかった。チリザさんはムシカジグループのメンバーとして活動を行うことになり、ンコシナチは苗の大口顧客を得た。背後にテーブルマウンテンのような美しいムシカジ山がそびえ、広大な畑のすぐ横には年中枯れない川が流れている。土壌がよく、質の高い作物が生産できるため、当時のスタッフと“ムシカジブランドの野菜を市場に出したいね”と話をしていたことが、今度こそ実現できるのではないかと期待している。



## ■ 図書事業

日本 NGO 連携・無償資金協力事業で行った“ウムズンベ自治区”の学生の経済・社会参加に向けた学力向上と基礎技能習得プロジェクトは、2月末に2年次を完了した。3月以降は、TAAA 事業として対象校の活動モニタリングと活動の継続・定着に向けた取り組みを行っている。特に図書委員会システムの強化に力を入れ、メンバー生徒の役割を明確にし、自覚を持たせるよう指導を行っている。司書教師には生徒を信頼して仕事を任せよう依頼している。

設備の不十分な学校への支援として、NGO 連携事業からクワプザ小ハコンテナ図書室を配備した。物置の小さなスペースを図書室として利用していた時から図書活動は活発に行われていたが、現在はコンテナ図書室で委員会メンバー生徒が大活躍し、図書室の管理と全校生徒への読書推進を行っている。校内でブックレビューとストーリーテリングのコンテストも開催した。コロコロ地域のフンドゥーゼ小には“ひろしま祈りの石財団”助成金よりコンテナ図書室を配備した。図書活動が定着するまでに少し時間がかかったが、スタッフのモンドリが司書教師および図書委員会メンバー生徒への研修、生徒と共に蔵書の整理や情報・アイデアの共有などで活動へのモチベーションを高めた。

ELITS（州教育省学校図書担当部門）は、担当者のンベレ氏がウグ郡の北半分という大変広い範囲をカバーしているため、本を配布するにしても、どの学校で準備ができているかを十分に把握できていない場合があり、TAAAのプロジェクトで図書室のベースができた学校を連絡すると、司書教師の研修や蔵書の補充をしてもらえるような連携体制ができた。

学校の運営は、校長の人柄や考え方、ネットワーク等にかなり左右されるが、プロジェクトは、担当教師の興味ややる気に大きく左右される。本当はやりたくないのに校長から任命されてしまったとか、他の担当もあって忙しすぎる場合もある。また、生徒がもっと活動を進めたいと思っても、生徒を信頼できず、図書室を閉めっぱなしにしてしまう教師もいる。プロジェクトを担当することは教師にとって“余計な仕事”であり、強制できるものではないが、例えばカンヤ高校のンバンボ先生は、現在司書になるための勉強をするほど図書活動に熱意を持ち、“プロジェクトで自分のやりたいことが見えた”と話す。彼女の努力でコンテナ図書室が充実し、生徒が積極的に図書室を利用するようになったことで、結果として高校卒業試験の合格率も上昇、学校全体がとても活発になっていった。

N連2年次には、日本から届いた算数セット（写真：右上）を利用し、小学校低学年生徒へのパイリンガル算数指導を行った。南アの生徒は全体的に算数が苦手・弱いと言われているが、理由の一つは言語によるものと考えられる。小学校低学年（3年生まで）は算数を母語のズルー語で

2月22日に地域のエシバニ二・ホールにて図書イベント・研修会を開催し、各対象校から司書教師と生徒の約100名が出席した。以前の事業で図書イベントを開催した時には、発表者は女子生徒ばかりだったが、今回は男子生徒がしっかりとブックレビューや活動の紹介を行っていた。ドナーを代表してプレトリアの日本大使館より有馬書記官が出席くださり、出席者への力強いメッセージをいただいた。州教育省からは、ELITS ンベレ氏とンクマロ教育センター長の出席があった。このようなイベントは他校の活動を見聞することや情報交換の場となり、学校にとってモチベーションとなる。コンテストではないが、良い活動や成果を表彰することで、他の学校も頑張ろうという気持ちになるようだ。今後は学校内もしくは近隣の学校と共同で読書促進イベントを行うよう伝え、早速近隣の中学校2校が合同で“ブックレビュー・コンテスト”を開催した。

N連事業では図書活動の中に生徒の基礎的なIT技術習得のプログラムを取り入れ、1・2年次各10校ずつ、計20校の図書室にノートパソコンとプリンターを導入した。今年度は各校がノートパソコンを有効に利用して行かれるよう、図書委員会システムの強化とメンバー生徒の役割を明確にするためのモニタリングを行っている。ノートパソコンは図書室をリソースセンターとして機能させるために配備されたもので、IT指導は単独のプログラムではなく、図書活動の一部であることを強調した。1台のノートパソコンではクラス全体で学ぶことは難しいが、図書委員会生徒が代表として学び、他の生徒にもピア教育をすることでリーダーシップも身につけられる。生徒は、本の貸出し管理やお知らせの作成など、実地をしながら学んでいる。昨年度ITプログラムに入れなかったヴェルメゼ小に今年度TAAA事業としてノートパソコンとプリンターを配備し、操作方法の基礎を指導している。



学ぶが、数に対応する単語を覚えるだけでも大変で、やっと慣れたころ4年生から急に英語での授業に対応しなければならぬ。そして教材不足も理由の一つと言えるだろう。教科書上での学習のみでは具体的な数の感覚がつかみにくい。事業を行う中で、改めて算数セットは素晴らしい教材だと感じた。家庭におもちゃなどを持っていない子ども



たちは、おもちゃを与えられたかのように遊びの感覚で楽しみながら算数を学んでいる。スタッフのモンドリは高校を出てすぐに TAAA スタッフになったが、まるでベテランの先生の様に的確な指導を行っている。

以前、算数セットを対象校に数箱ずつ配布したところ、うまく使いこなせる学校とそうでない学校があったが、昨年度はクラス全体で生徒一人一人が使って授業ができるように十分な数を配布した。できるだけ同様のパーツを入れるようにし、特にブロックは生徒が混乱しないよう、学校ごとに白・黄、ピンク・ブルーを統一するようにした。前年度の指導で、沿岸部の生徒数の多い学校では、算数の基礎を理解しないまま次の学年に進んでいく生徒が多いことを把握し、今年度は沿岸部のジュニアプライマリー2校に重点を置いて、週2日ずつ訪問し、1年生から3年生まで、すべてのクラスで担任に使い方を理解してもらっている。今年に入ってエシバニニ小に20箱程配備したが、1年生から4年生まで各学年4クラスずつあるため、まだまだ必要である。

やはり前号でお伝えした通り、移動図書館車“きぼう号”がリタイヤし、州教育省ムタルメ・トゥートン学区・教育センター内に設置され、再スタートを切った。図書館車の中には絵本やアニメから小説、参考書など、様々なジャンルの本を搭載して、周辺の学校の生徒の利用が始まった。利用にはまず教育センター内図書館のメンバー登録用紙に記入し、保護者と学校からサインをもらって提出してメンバーとなる。将来的には地域住民にも利用され、公共図書館の役割を果たしてもらえればと期待している。

## ■ サッカー事業

久我さん、大友さんが日本から持って来てくださった浦和レッズのユニフォームをモンドリ主催のサッカーチームのメンバーに寄贈した。小学生のメンバーにはちょっと大きかったが、皆大喜びだった。はだしの選手が多く、中には片足だけサッカーシューズをはく選手もいた。小学校高学年ですでにレギュラーポジションを得ている選手もいる。モンドリコーチが厳しいため、選手たちはまじめで礼儀正しい。毎日夕方に練習をして、週末は他のコミュニティーチームと試合をしており、まだスタートしたばかりだが、めきめきと実力をつけてきている。



## 8月19日の作業

### ～小さな手から～

西村 裕子

猛暑続きの今夏、8月の作業日は、秋のように涼しく爽やかで、まさに作業日和！

三井住友グループの皆さんと、中学3年生の男子生徒さん（以前も作業に来てくれました）が、参加して下さい、大人数でした。

1時間ずつ、パッキング班と、「ぐりとぐら」シール貼り班に分かれて作業開始。

パパと一緒に来てくれた、5歳の女の子も一生懸命お手伝いしてくれました。シール上手に貼れましたね！

まだ、南アフリカという国の名前を知らないかもしれないけど、自分が5歳の時にシールを貼った「そらいろのたね」という本や、段ボールに入れた本が南アフリカに届いて、みんなが喜んでいることを、いつかパパと話す機会があるでしょう。

日本の小さな手から、南アフリカの小さな手に、本が繋がったな～と思える作業日でした。

もちろん大人の皆さんも、力仕事からコツコツ地味な作



業まで、たくさんこなして下さい、ありがとうございました。涼しいとは言え、やっぱり大汗でしたね！！

またのご参加、お待ちしております♪ お疲れ様でしたー。



2017年度（平成29年度）決算報告書（2017年4月1日から2018年3月31日まで）

科 目	金 額		単位：円
<b>I 経常収益</b>			
1 受取会費			
正会員受取会費	120,000		
賛助会員受取会費	0	120,000	
2 受取寄附金			
受取寄附金	1,504,000	1,504,000	
3 受取助成金等			
受取公共助成金	12,200,000		
受取民間助成金	968,000	13,168,000	
4 その他収益			
受取利息	50		
雑収入	23,340	23,390	
<b>経常収益計（A）</b>			<b>14,815,390</b>
<b>II 経常費用</b>			
1 事業費			
(1)人件費			
給料手当	10,429,281		
臨時雇賃金	287,117		
法定福利費	0		
人件費計	10,716,398		
(2)その他経費			
プロジェクト物資購入費	2,794,222		
研修費	134,118		
制作費	0		
プロジェクト物資輸送運搬諸経費	551,971		
旅費交通費	575,654		
車両諸経費	3,538,599		
燃料費	1,099,092		
視察訪問費	756,618		
専門家派遣費	0		
施設使用料	1,000		
会議費	45,711		
通信・運搬費	213,561		
印刷・製本費	87,520		
消耗品費	89,173		
水道光熱費	27,682		
地代家賃	512,964		
支払手数料	0		
保険料	196,790		
雑費	71,516		
その他経費計	10,696,191		
事業費計		21,412,589	
2 管理費			
(1)人件費			
臨時雇賃・講師代	0		
役員報酬	0		
人件費計	0		
(2)その他経費			
会議費	30,158		
旅費交通費	9,172		
車両諸経費	97,757		
燃料費	0		
通信運搬費	34,276		
印刷製本費	2,315		
消耗品費	38,891		
水道光熱費	0		
支払手数料	164,126		
地代家賃	90,988		
事務所設備・修繕費	77,221		
業務委託費	100,000		
租税公課	0		
雑費	23,198		
その他経費計	668,102		
管理費計		668,102	
<b>経常費用計（B）</b>			<b>22,080,691</b>
<b>当期経常増減額（A－B）</b>			<b>▲ 7,265,301</b>
<b>III 経常外収益</b>			
1 固定資産売却益		0	
<b>経常外収益計（C）</b>			<b>0</b>
<b>IV 経常外費用</b>			
1 過年度損益修正損		0	
2 為替差損		0	
<b>経常外費用計（D）</b>			<b>0</b>
<b>①当期正味財産増減額（A＋B＋C＋D）</b>			<b>▲ 7,265,301</b>
<b>②前期繰越正味財産額</b>			<b>11,844,511</b>
<b>次期繰越正味財産額（①＋②）</b>			<b>4,579,210</b>



## 主な活動（2018年2月16日～2018年8月15日）

### 〈日本国内〉 TAAA 会員とボランティア

- 2月～7月 広報 報告会の準備 丸岡 晶  
 2月～7月 本などの受け取りと作業場への搬入 北爪 健一  
 2月中旬～下旬 住所名簿・ラベル変更 西村 裕子  
 2月～8月 ホームページ更新 久我 祐子 渡恵 美子  
 2月～3月 会報編集・校正 野田 千香子 西村 久我  
 2月～3月 会報71号発送準備作業 高野 千恵美 野田  
 2/18 梱包作業 野田 大友 深雪 久我 西村 丸岡  
 2/21 セントメリーインターナショナルスクールから本引き取り 浅見 克則  
 3/18 梱包作業 大友 浅見 野田 高野  
 4/15 梱包作業 浅見 西村 野田  
 理事会 久我 浅見 下谷 房道 丸岡 野田  
 4/16 N連外部監査訪問 経理申告 久我  
 5/16 外務省N連事業完了報告書提出 久我  
 5/19 アメリカンスクールインジャパンから本150箱引き取り 浅見 下谷 西村  
 5/20 梱包作業とTAAA総会 久我 浅見 大友 丸岡 西村 野田  
 5/30 JICA東京派遣学生の安全対策講座 参加 久我 大友  
 5/30 東京農業大学 派遣学生とのミーティング 久我 大友  
 6/6 セントメリーインターナショナルスクールから本引き取り 浅見  
 6/16 NLA（野尻）から本引き取り 浅見 ラング・クレイグ ヒル  
 6/17 梱包作業 森直之 野田 高野  
 6/15～26 南アフリカ プロジェクト視察訪問 久我 大友  
 6/21 クリスマスアカデミーインターナショナルスクールから本引き取り 浅見  
 7/12 JICAミーティング 平林 大友 久我  
 7/14 TAAA 報告会 JICA にて 大友と平林薫が講師  
 7/15 梱包作業と本種分け 平林薫 大友 野田 小泉 信一郎  
 7/18 算数セットを南アへ出荷 浅見 野田  
 7/24 東京農大派遣学生とのミーティング 菜園事業に関するミーティング 平林 大友 久我  
 8/8 本の種分け作業 野田 大友 久我

### 〈南アフリカ共和国〉 平林薫と南アフリカのスタッフ

- 2/16～21 N連図書事業 読書推進イベント、研修会準備  
 2/22 エシバニニ・ホールにて読書推進イベント、研修会開催  
 2/23 N連図書事業 ITプログラム修了証書作成  
 2/26～3/2 N連図書事業 ITプログラム修了証書配布、事業終了スタッフ送迎会。JICA 農業塾でスタッフ会議、山間部での有機農業トレーニングコース準備と開催。  
 3/5～9 TAAA 図書事業学校巡回訪問、活動モニタリング。JICA 農業塾でスタッフ会議、山間部での有機農業トレーニングコース開催、備品購入と配備。  
 3/12～16 TAAA 図書事業学校巡回訪問、活動モニタリング、シノクボンガ中ブックレビューコンテスト出席。JICA 農業塾でスタッフ会議、山間部での有機農業トレーニングコース開催、農業塾図書室で蔵書の補充・整理。  
 3/19～23 TAAA 図書事業学校巡回訪問、活動モニタリング、廃校となったシブコセトゥ高から蔵書の引き揚げ、山間部トレーニングコース参加者のエナレニ農場研修、会計・事務処理。  
 3/26～29 JICA 農業塾でスタッフ会議、山間部での有機農業トレーニングコース卒業式準備と開催。  
 4/3～6 JICA 農業塾でスタッフ会議、会計・事務処理  
 4/9～13 州教育省ジンヤ氏と会議、JICA 農業塾でスタッフ会議、報告書作成  
 4/16～20 TAAA 図書事業学校巡回訪問、活動モニタリング。JICA 農業塾でスタッフ会議、養鶏研修会準備と開催、農業塾図書室蔵書整理。  
 4/23～27 TAAA 図書事業学校巡回訪問、活動モニタリング。JICA 農業塾でスタッフ会議、養鶏研修会開催。  
 4/30～5/4 図書事業学校訪問、モニタリング、本の寄贈。農業塾会議、山間部での有機農業トレーニングコース準備と開催。  
 5/7～11 TAAA 図書事業学校巡回訪問、活動モニタリング、本・算数セットの寄贈。JICA 農業塾でスタッフ会議、山間部での有機農業トレーニングコース開催、州環境省ザマ氏と会議。  
 5/14～18 TAAA 図書事業学校巡回訪問、図書委員会活動サポート、本の寄贈。山間部での有機農業トレーニングコース開催。  
 5/21～25 TAAA 図書事業学校巡回訪問、算数セット指導。JICA 農業塾でスタッフ会議、農業塾図書室および図書館バス蔵書整理。JICA プレトリア事務所でSHEPセミナー出席。  
 5/28～6/1 TAAA 図書事業学校巡回訪問、クワブザ小図書イベント出席。JICA 農業塾でスタッフ会議、敷地整備、山間部での有機農業トレーニングコース卒業式準備と開催。  
 6/4～8 TAAA 図書事業学校巡回訪問、本の整理と学校への寄贈、ELITSMベレ氏と会議。JICA 農業塾でスタッフ会議、卒業生活動モニタリング、養鶏研修会開催。  
 6/11～15 学校巡回、本整理と学校へ寄贈。農業塾でスタッフ会議、卒業生活動モニタリング、日本TAAAメンバー視察訪問準備。  
 6/16～25 久我、大友、南ア現地活動視察訪問。  
 6/26～29 JICA 農業塾で会議、卒業生活動モニタリング。  
 7/1～8/1 一時、日本へ帰国 平林  
 8/3 農業塾でスタッフ会議、7月の活動報告と今期の活動計画。  
 8/6～10 JICA 農業塾でスタッフ会議、敷地整備、卒業生活動モニタリング、州環境省ザマ氏と会議、研修会準備。  
 8月13～15日 JICA 農業塾でスタッフ会議、敷地整備、卒業生活動モニタリング、研修会準備。



7月帰国中の平林（右）と本の種分け作業